

氏名・(本籍地) 岩本 操 (神奈川県)

学位の種類 博士(人間学)

学位記の番号 甲第87号

学位授与の日付 平成24年3月15日

学位論文題目 ソーシャルワーカーの「役割形成」に関する研究 —精神科病院におけるソーシャルワーク実践に焦点をあてて—

論文審査委員 主査 野田 文隆

副査 石川 到覚

副査 木下 康仁

## 岩本 操氏 学位請求論文審査報告書

### 「ソーシャルワーカーの「役割形成」に関する研究 —精神科病院におけるソーシャルワーク実践に焦点をあてて—

#### 論文の内容の要旨

本論文は序章を含め6章からなる。序章では問題の所在と研究目的に触れる。ソーシャルワーク(SW)という広域の仕事が、その性格ゆえに曖昧さを内包し、それが現場のソーシャルワーカー(SWR)を混乱に落とすことがあるという現実から出発し、なおもその曖昧さをSWへ繰り込むとはどういうことかを問うている。そのプロセスを理論化することを「役割形成」と定義づけている。そのため、研究対象は、精神科病院におけるソーシャルワーク実践とし、SWRが病院組織から要請される「違和感のある仕事」に対応するプロセスに焦点をあてて研究を進めるとしている。第1章では「SWRの専門職性と自己規定」を論じている。ここではSWの歴史に触れ、近年のSWの属性モデルと生活モデルの葛藤に触れ、SWRの自己規定の揺らぎを論じている。第2章では「病院組織とSW」という視点で論じている。精神科病院のソーシャルワーカーは病院組織から要請される様々な「違和感のある仕事」と対峙するという歴史的なジレンマを抱えてきた。それは病院組織の問題や矛盾を反映したものであるが、同時に組織の改善を志向する資源でもあると述べている。第3章では「ソーシャルワーカーが経験する『違和感のある仕事』」の実態に触れている。まずグループインタビュー調査として、経験10年以上の「管理職グループ」と経験3～5年の「若手グループ」の2つのグループインタビューを実施し、グループごとの内容分析に加えて複合分析を行っている。結果として、PSWが経験する「違和感のある仕事」の内容は、「病院経営」「運営・管理」「ベッドコントロール」

「面倒事の請負」「間に入る・隙間を埋める」「他部署・他職種の業務の請負」「担当不明の仕事」の7つが抽出されている。一方、全国の精神科病院に勤務するPSWを対象に質問紙によるアンケート調査も行っている。結果から、PSWは「違和感のある仕事」を否定はしないが、PSWの仕事として意味づけすることもなく、現状に「同化」あるいは「態度保留のまま許容」している傾向が示された。また、経験年数が高いほど業務範囲を「限定すべきでない」と回答するものが増えていた。第4章では「ソーシャルワーカーの「役割形成」プロセス」を論じている。病院組織から能動的なソーシャルワークを展開する一定の力量を有していると認められる調査協力者12名に対して、半構造化面接によるデータの収集を行ない、そのデータに修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ(M-GTA)による分析を加え、精神科病院のPSWの「役割形成」プロセスの理論化を行っている。分析テーマを「精神科病院のPSWが組織から要請される違和感のある仕事をソーシャルワーカーとして『役割形成』していくプロセス」とし、分析焦点者を「精神科病院に勤務するソーシャルワーク経験10年以上のPSW」としている。MGTAからは、分析の結果、34の概念、5つのカテゴリー(【I】で示す)、6つのサブカテゴリー(< >で示す)が生成された。そのストーリーとしては、PSWは、病院組織から「経営のプレッシャー」「責任回避のしわ寄せ」などの違和感を覚える仕事を要請される。ここでPSWは【多元的ポジショナリティの不協和】を経験する。「ソーシャルワーク探索」と「ソーシャルワークのカッコ入れ」という<二分するベクト

ル>を同時に起動させ、【現場密着型のコア形成】と【ソーシャルワーク主義の脱皮】を相互に関連づけようとする。【現場密着型のコア形成】はPSWが「ソーシャルワーカーであること」にこだわりきりの中で生み出された必然と言えるが、一方でPSWはそのこだわりから距離を置くように【ソーシャルワーク主義の脱皮】を図る。SWの視点をいくら強調しても埒が明かない現実に直面したPSWは、まず自らを経営者の立場に置き、【組織環境を概観する】ことで【経営のプレッシャー】の背景を理解する。そして病院経営が成り立たず医療サービスが機能しない事態は利用者利益を損なうという観点から【経営の再規定】を行い、【現場密着型のコア形成】に立ち戻りながら、利用者と病院組織【双方の利益を結びつける】ことを目指して組織関係者に働きかける。同時に、【医療スタッフの閉鎖性】による【抵抗と対峙】し、<行き詰り体験>に陥ってしまうが、PSWは改めて【ソーシャルワーク主義の脱皮】を起動させ、自らが【触媒として機能する】ことで状況の改善を迫っていく。関係者が「このままでは自分たちも困る」という【当事者意識の喚起】を促し、状況改善への合意形成をもたらすのである。その結果、利用者利益に適った組織機能の活性化が図られ、【双方の利益を結びつける】仕組みが組織に定着していく。つまり、PSWの「役割形成」プロセスとは、利用者と組織【双方の利益を結びつける】営みであり、それを促進するPSWの実践基盤は【アイデンティティの止揚によるミッションの具体化】であることが示されている。第5章では「研究の意義と課題」が述べられる。意義はMGTAによりソーシャルワーカーの「役割形成」として、組織と利用者【双方の利益を結びつける】プロセスを提示した点であると述べている。本研究は従来のソーシャルワーク研究から周辺化され除外されてきた現象に着目したが、結果は「生活モデル」を実践に反映させる1つの技法の提示となり、従来のアイデンティティ論を再考する機会を提供したと記述する。また、研究の限界としては、「マクロ-メゾ-ミクロ」の包括的枠組から考察する視点や、研究結果を「ソーシャルアドミニストレーション論」や「福祉経営」の観点から比較検討する視点が乏しかった点を述べ、また、SWRが違和感を感知し保ち続けるメカニズムについては言及できないと締めくくっている。

#### 審査結果の要旨

まず、この研究がソーシャルワークの分野で展開されながら「べき論」に偏することなく、徹底的にソー

シャルワーカーの現実に即し、「いま、ここで」展開されている現象を緻密に分析し、精神科病院という組織の中で困難な状況にさらされ、日々SWらしくない営為を余儀なくされていることの多いSWRがそれらの「違和感のある仕事」をどうSWへと転換していくかのプロセスを解明した点に大きな意義があると考えられる。先行研究の多くは、日本の精神科医療の矛盾や問題点の中で、SWRが「できないこと」の壁に対し、SWRの専門性やアイデンティティの確立を唱えてきた。しかし、その方向はマクロには意義あっても、「いま、ここで」のSWに対して解を与えるものは少なかったと言える。そのため、SWの多くは「すべきこと」と「できないこと」の狭間に置かれ、いわばアイデンティティのクライシスを経験することが多かった。唯々諾々と与えられた仕事をこなすか、精神科病院という組織に抗して地域に活躍の場を求めるかの2極化現象も歴史的には見られてきた。その意味で、この研究は【多元的ポジショナリティの不協和】を経験しつつも、【現場密着型のコア形成】を死守し、かつ【ソーシャルワーク主義の脱皮】を試みるというパラダイムを提案している。そして、利用者と組織の【双方の利益を結びつける】【触媒としての機能】を重視している。それが【アイデンティティの止揚によるミッションの具体化】であり、その行為こそが中心的論旨である「SWRの役割形成」であると述べている。この研究成果はオリジナリティに富み、現場に一つの方向を提示するものであると言える。実は、多くの現場で働くSWRが感じ、日々実践している営為を、明確に言語化した作業は過去にはなかったものと言える。「違和感のある仕事」はやらされつつ、実はやりたくないというのが現状であろうが、それがSWとして位置づけられるという言説は一種のコペルニクス的転回とも言えよう。副査の言葉を拾うなら、「精神科病院で精神保健福祉士として経験豊富なソーシャルワーカーらが置かれている現実を切り出して可視化した点は大いに評価出来る」「言説分析に伴う中核の概念形成が「アイデンティティの止揚によるミッションの具体化」を新たに導き出したことがオリジナリティと言える」（石川）「組織やシステムが明確に確定されていない精神科病院においてソーシャルワーカーが多様な活動を日常的に実践している世界を全体としてモデル化してとらえており、経験的に知られていたものを全体として可視化している。それにより、経験的知識を共有可能な形にすることに成功している」「M-GTAの分析方法をよく理解できている記述となっている。と

くに、解釈結果だけを記述するのではなく、解釈を確定するまでの検討過程の説明的記述により、解釈内容の適切さ、説得力を担保している」(木下)と評価されている。一方、この研究の弱点を挙げるならば、研究のスキーム自体があまりに現実に即するあまり現実を改革する力に乏しいということであろう。日本の長い精神科病院の歴史の中で、多くのSWたちは患者のアドボカシーと精神医療の改善のために、汗をかいてきた。それは、「何でも屋」と称される、SWRの地位の向上の戦いであり、SWの質の向上の奮闘であった。それをしなければ、まだまだ収容主義に走る精神科病院が患者を地域に還さず、人権をないがしろにした商業主義が横行する危険があったからである。その歴史の中で、本当に【ソーシャルワーク主義の脱皮】をしていいのか、アイデンティティを止揚していいのかという批判はあるであろう。ある意味、研究の枠組みを超えた、イデオロギー的な問題であるが、その点は看過できない要素である。この論文はその領域には踏み込まなかった点を惜しくも思う。その点は副査も「精神科ソーシャルワークの問題というよりも、医療機関内の現実追隨の言説ではないかとの批判を受けるだろう」(石川)と論じている。精神科病院内のSWRに絞った研究だったので、言説が制約を受けた点もあるであろう。

しかし、当論文は技法において、アンケート、グループインタビュー、個人的聞き取りという調査の必要十分を満たす構成要素からなっており、分析は組織内ダイナミクスを描きだすのに妥当であるM-GTA法を用いている。また、描きだされた考察も「記述による結果表現の形となる質的研究では論理的緻密さがカギとなるが、本論文は問いの設定、結論を導く分析内容とその説明、結論、その意義と実践活用の全般にわたって課程博士論文として十分な水準に達している」という副査の言葉(木下)をひくまでもなく、質の高いものであり、優れた課程博士論文として認めるものである。